別紙１－１

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 お よ び 担 当 者

報告番号	※　　第　　号

氏　　名　KLOYAN Luiza

論 文 題 目　アルメニア語の非定形名詞修飾表現
　　― 日本語および英語との対照を通して ―

論文審査担当者

主　査　名古屋大学教授　　堀江薫
委　員　名古屋大学教授　　杉村泰
委　員　名古屋大学准教授　奥田智樹
委　員　名古屋大学准教授　秋田喜美
委　員　名古屋大学准教授　志波彩子

別紙１－２

［本論文の意義］

本研究は、関係節構文に関する言語類型論研究、及び連体修飾節（名詞修飾節）構文に関する寺村（1992）の先駆的研究、さらに Shibatani（2017，2018，2019）が提唱した体言化理論を援用し、日本語や英語との比較を通じて、アルメニア語の非定形名詞修飾表現の諸現象を包括的に捉え直すことを目的としている。アルメニア語は、インド・ヨーロッパ語族に属しながら、ヨーロッパ言語に多く見られる定形の「関係節」以外に、多様な「非定形」の名詞修飾表現を有するという興味深い類型論的特異性が見られる。本研究の意義は、これまでのアルメニア語学の枠組み、あるいは一般言語学の枠組みにおいてなされてきた研究においては十分に解明されてこなかった、アルメニア語の多様な非定形の名詞修飾表現が持つ統語的・意味的・語用論的な特徴を、日本語学や言語類型論の名詞修飾表現に関する研究の洞察や、最新の体言化に関する機能類型論的な分析の枠組みを援用して詳細に解明した点にある。

［本論文の概要］

本論文は 8 章より構成される。まず、第 1 章でアルメニア語の基本的な文法的特徴を概観し、第 2 章で、本研究の分析に関わる名詞修飾表現に関する記述的・類型論的研究、及び体言化に関する理論的研究の主要な知見を導入した。第 3 章以下は各論である。

第 3 章では、まず、アルメニア語の非定形名詞修飾表現における分詞形が、Keenan and Comrie（1977）の提案した名詞句接近可能性階層において如何なる振る舞いをするかを分析した。その結果、「結果分詞」が名詞句接近可能性階層において、最も高い生産性を見せており、「原因・理由」と「対比・比較」を表す奪格名詞句以外は、結果分詞による名詞修飾が問題なく成立することが確認できた。一方、「主体分詞」や「未来分詞」は「結果分詞」に比べるとその分布が限定しており、前者は「主語」である場合、「主語」が文脈から想定可能な受動文の場合、或いは「主語らしい」構文を形成している場合に使用される分詞であることが確認できた。一方、後者は、主体分詞がカバーしていない格関係・意味関係（例：主名詞が主格と与格の関係にある場合）において成立することが確認できた。

第 4 章では、日本語の「外の関係」に対応する、アルメニア語の非定形動詞による名詞修飾表現を日本語の名詞修飾表現との比較を通じて検討した。そして、アルメニア語の非定形名詞修飾表現が日本語の名詞修飾表現とかなりの程度対応関係を見せていることが確認できた。具体的には、日本語の「外の関係」の名詞修飾表現に対して、アルメニア語では、不定詞による名詞修飾表現がかなりの程度対応しているが、一方で、修飾表現と主要部名詞の間に「直接的な因果関係」、「時空間的な隣接性」、「アスペクト的な制約」のような制約が関わっており、不定詞による名詞修飾表現が不可能になるケースも観察された。特に重要な観察として、アルメニア語の名詞修飾表現では、主要部名詞と修飾節の間に許容される意味解釈上の懸隔（ギャップ）の範囲が日本語よりも狭いということが明らかになった。

第 5 章では、アルメニア語の名詞修飾表現において非定形動詞が表す、いわゆる形容詞的な意味・用法について考察した。結果分詞の形容詞的な意味が成立する傾向として、(i) 結果状態の焦点化、(ii) 比喩的に発達した（慣用句的な）表現、(iii) 語彙化した表現の 3 種類が観察された。また、本動詞が非変化動詞の場合であっても、結果分詞の形容詞的な意味が成立する

別紙１－２

場合があるという点で、日本語の連体形動詞との相違点が確認された。

第 6 章では、アルメニア語の非定形動詞による名詞修飾表現を、柴谷方良氏の提案した「体言化理論」（Shibatani（2017, 2018, 2019））の観点から捉え直すことを試みた。その結果、ここまで見てきた分詞による名詞修飾表現と不定詞による名詞修飾表現は、それぞれ「項体言化構造（argument nominalization）」と「事態体言化構造（event nominalization）」に当てはまることが明らかになった。そして、従来の属格・所有表現を体言基盤体言化であると再分析し、用言基盤体言化（分詞、不定詞構文）は、体言基盤体言化をモデルに発達した用言基盤体言化であると主張した。また、体言基盤の体言化構造の場合は属格接辞が体言化辞として機能しており、用言基盤（動詞語根）の場合には（日本語の動詞の連体形と同様に）分詞化接辞が体言化辞であることを明らかにした。この点において、不定詞形は通常の体言と同様な振る舞いを見せていることが明確になった。

第 7 章では、アルメニア語の非定形名詞修飾表現（体言化構造）のテンス・アスペクト的な振る舞いについて再検討した。そして、個々の分詞形が表しているテンス・アスペクト的な意味は、分詞の形からのみ生み出されるものではなく、日本語の連体形動詞の「ル」形と「タ」形と同様に、動詞（句）の有する特性、語彙的アスペクトや文脈によって与えられるものであることが確認できた。特に、日本語の連体形動詞の「タ」形とアルメニア語の名詞修飾表現における結果分詞の対応関係については、テンス・アスペクト的な現れ方に関して、ほぼ同様な振る舞いをすることが明らかになった。ただし、三原（1992）の「視点の原理」に関しては、両言語間で平行的な現象が観察されなかった。一方、主体分詞は特定の時制に縛られておらず、動作主体が表している行為をあらゆる時制的な領域において表せる形式であり、日本語の「テイル」形だけではなく、「ル」形や「テイタ」形にも対応している形式であることが明らかになった。

第 8 章では、本博士論文で得られた知見を総覧し、残された課題を述べた。

［審査委員会による審議および合否判定］

口述試験では、申請者の方から博士論文の概要についての説明が行われた後、審査委員から質疑応答が行われた。本博士論文が、日本語や英語の名詞修飾表現の先行研究、類型論の先行研究を渉猟し、アルメニア語の非定形名詞修飾表現という、通言語的な観点からこれまで体系的に研究されてきていない文法現象の解明を行ったスケールの大きい労作であるという高い評価を委員各位から得た。一方で、性質の異なる研究テーマが複数含まれていながら十分に構成の上で統合されていない点、説明の全体的首尾一貫性に欠ける部分がある点、アルメニア語という人口に膾炙していない言語に対する導入的な説明に不足がある点などの改善点も指摘された。全体として、本論文は質・量ともに博士後期課程の学位論文としての基準を十分に満たしているとの判断に委員会で至った。したがって、本論文を合格と判断した。